

## 主 題：神に仕える人

聖書箇所：ローマ人への手紙 1章8－15節

これまで自分のことについて話をしてきたパウロは、8節からはローマの兄弟姉妹たちのことを彼がどのように思っていたのか、彼らに対してどのような思いを抱いているのか、そのことを話し始めるのです。彼はローマの兄弟姉妹たちに実際に出会って、お互いの信仰を成長させたいと望んでいました。そして、できるだけ一日も早くあなたがたに会いたいと、その思いがこの中に綴られています。このパウロの彼らに対する思いからも私たちはパウロがどのような人物であったのかを知ることができます。パウロ、神に仕えた人です。その神に仕えた人がどのような人なのか、そのことも私たちはこの箇所から見るすることができます。どのような思いをもって彼は神に仕えていたのか、そして、どのような思いをもって私たちは神に仕えて行くのか、そのことをパウロは私たちに教えてくれます。

## ☆神に仕えるとは？

## 1. 主への感謝

8節には「**まず第一に、あなたがたすべてのために、私はイエス・キリストによって私の神に感謝します。それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。**」と記されています。先ず、彼はこのローマにいる兄弟姉妹のことを主に感謝すると、その感謝から始めています。なぜ、パウロは彼らのことを感謝したのでしょうか？それは、ここに記されているように「**あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。**」。もちろん、これは世界中のすべての人がローマの信仰者たちのことを知っていたということではありません。この当時、ローマ帝国は世界を治めていたので、その中にあって彼らのことがよく知られていたと言うのです。この帝国ではローマが中心です。多くの人々がこのローマを訪問したのでしょうか。その際に、どのような形であったかは分かりませんが、このローマにいるクリスチャンたちのことを彼らは直接見たり、聞いたり、接したりして、そのニュースが国内に広がって行ったのです。それでパウロはそのことが全世界に言い伝えられていると、そのようにここで記したのです。非常におもしろいと思うことは、ローマのクリスチャンたちが「私には信仰がある」と言ったのではなく、そのクリスチャンたちを見た人たちが「彼らには信仰がある」と言ったことです。同じようなことを、私たちは「テサロニケ人への手紙」の中にも見るすることができます。テサロニケのクリスチャンたちの信仰はどうだったでしょう。テサロニケ1：8を見てください。「**主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているのです、私たちは何も言わなくてよいほどです。**」とある通り、マケドニヤ地方、今のギリシャですが、そこからずっと南のアカヤ地方にまで彼らの信仰が伝わっていたと言います。どういう形であったかは分かりませんが、人々はそのクリスチャンたちを見て、明らかにこの人たちは他の人たちとは違うと言ったのです。アンテオケで初めてあるグループを人々は「クリスチャン」と呼びました。なぜ、そのように呼んだのでしょうか？彼らはキリストに従う者たちだったからです。彼らはいつもキリストのことを話していたし、キリストのために生きていたからです。ということは、信仰というのは周りの人々によって明らかにされるものです。なぜなら、救いというのは新しく生まれ変わることであり、生まれ変わったことは必ず人々の前に明らかにされるものだからです。今でも私は思い出しますが、今から38年ほど前のこと、初めて教会へ行って信仰をもって、その後、自分ではそんなに変わったとは思っていませんでしたが、母が「イエスさまを信じてからあなたは変わった」と言うことを聞いて、ああそのように神は働いてくださったのだなあと思いました。皆さんもそうでしょう。ときに「それでもクリスチャン？」と言われますが、逆を言うなら、皆さんに「違い」を見ているからです。信仰とはそういうものです。私たちのうちが変えられたなら必ず行動が変えられて行きます。そして、行動が変えられることによって周りの人たちは「いったい何がこの人たちに起こったのか」ということを考え始めるのです。

ですから、マタイ7：15－20にイエスは実によって彼らを見分けることができると話されました。

「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。：16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。：17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。：18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。：19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。：20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」、イエスが言われたことはだれでも分かります。良い実はずいぶん良い木が生み出すものと、その人がどういう人なのか、どういう生き方をしているのか、その人の生き方、その人の歩み、その人の行動、態度など、その人のすべてがその人がいったい何者なのか、その信仰の有無を明らかに

するのです。Iペテロ4：2-4を見てください。同じようなことをペテロもここで教えています。「こうしてあなたがたは、地上に残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。：3 あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、醉酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけたものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。：4 彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ぎた放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います。」と、ペテロがここで教えていること、それは救われている人の特徴です。罪赦されて神の子とされた人の特徴です。それは、その人は神の前に正しいことを行ない、神の前に間違っことは行なわないように生きている人です。救われている人には新しい願いが与えられます。それは2節にある通り「**神のみこころのために過ごすようになる**」、神の前に正しいことをして行きたい、神が喜ばれることをして行きたいと、そのような新しい願いをいただくのです。マタイ7：21でイエスはこのように言われました。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」と。何を言うかではないのです。その人がみこころを行なうかどうかなのです。神が命じておられることに従って行くかどうかなのです。そうして、救いに入るのです。「あなたはわたしに逆らっているが私に従って来なさい。罪を悔い改めてわたしを信じなさい。」と、そのみこころに私たちは従い、従って本当に救われた人は継続してみこころに従って行きたいとなります。ですから、イエスが言われたことは、ことばで何か言ったとしても、その人がみこころに関心がなくみこころに従っていないければ「のろわれた者ども」と言われます。つまり、救われていないと言っているのです。また、IIコリント5：15ではパウロがこのように言っています。「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」、イエスが私たちのために死んでくださったのは、救われた私たち一人ひとりが「**自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きる**」、つまり、生き方が変わると言うのです。ですから、みことばが私たちに明らかに教えてくれていることは、Iペテロ4：2-4を見て、救われた人は必ず神のみこころに従って行きたいとする人たちだということです。今までの罪の生き方ではなく、私は神が喜んでくださるよう神のみこころに神の命令に従って行きたいと、そのように生きようとする人々であると、なぜなら、救われたから、この方に対する感謝がそのような生き方をするようにと私たちを後押ししてくれるのです。

同時に、このIペテロ4：2-4では、そのように正しい生き方をする、神のみこころに従って生きて行こうとする、それだけではなく、神が喜ばれない罪の生き方から離れて行こうとします。肯定的な面と否定的な面が必ず出て来ます。ここでも、神の前に喜ばれることをしようとする人は、神が喜ぶことを行なうだけでなく、神が嫌われることから離れようとするのです。間違っことを行ないたくないと言うのです。3節にあります。「**あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていること…**」、つまり、救われていない人々、神を知らない人々がしたいと思っていることはもうしたくないと言っているのです。ここに神を知らない人々の生き方として六つのことが記されています。「**好色**」、不道徳な放縦な生き方です。男女間のだらしない振舞い舞いです。「**情欲**」、不純な欲望です。「**醉酒**」、酒好き、特にこれは酒にあふれるという意味で、酒びたりになる、習慣的に、「**遊興**」、酔っ払いたちが道を歩いているその様です。「**宴会騒ぎ**」、飲み続けること、「**忌むべき偶像礼拝**」、法に反すること、違法のこと、特に、これらが偶像礼拝に関連していたのです。性的な罪や今見て来た様々なことが、この当時、この「**偶像礼拝**」と強く結び付いていたのです。これらのことをもう私はしたくないと言うのです。ペテロが言っていることはこのような生き方を私たちはして来た、しかも、これらの六つの名詞形は全部複数形で記されているということは、頻度を表わしています。そのような生き方を繰り返し行なってきたということです。そのような生き方を私はもう止めた、だから、「**過ぎ去った**」ということばを使って、このことばの時制は完了形、もう終わったこと、生まれ変わって新しくなったから、そのような生き方に戻りたくないと言うのです。ですから、このように見たとき、救われた人の特徴は明らかです。その人の生き方が明らかにするのです。神の前に喜ばれる正しいことを選択し、同時に、神が嫌われること、これまでして来た生き方から私は離れましょうと、そのようにペテロは私たちに教えてくれているのです。

もう一度、ローマ書に戻ってください。最初に話したように、パウロは神に仕えた人でした。彼がどのような人物であったか見ることができると言いました。この8-9節に出て来ます。

◎神に仕える人、パウロはどのような人物であったのか？

### 1) 主を知っている人 8節

つまり、主がどのようなお方であるかをパウロはよく知っています。なぜなら、パウロはこのローマのクリスチャンたちのことを神に感謝していると最初から見て来ましたが、彼は何を感謝しているのでしょうか？「**あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているから**」、つまり、救われているということ、そのことを神に感謝しているのです。パウロにとって、罪人が救われるということほどうれしいことはなか

ったのです。一人の罪人が悔い改めてこの救いにあずかることは、天使たちも大喜びしますが、パウロ自身にもこれほどうれしい知らせはなかったのです。そのことを私たちはここで見て取れるのです。「**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。**」（Iテモテ2：4）とあります。神が望んでおられることはすべての罪人が悔い改めることです。パウロはそのことを知っていました。ですから、パウロは一人でも多くの罪人がこの救いにあずかることを望んでいたのです。なぜなら、それが神のみこころであることを知っていたからです。だから、喜んだのです。あなたたちの信仰が本物であることを喜ぶと。しかし、パウロは彼らをほめていません。神に感謝します。救いがどこから来るのか、そのことをパウロは分かっていたのです。ですから、おもしろい表現を使っています。「**私はイエス・キリストによって私の神に感謝します。**」と。パウロは「私は私の神に感謝します」とは言わなかった、「**イエス・キリストによって**」と言っています。イエス・キリストを通して父なる神に感謝をささげているのです。なぜでしょう？そのことは私たちはもう今まで学んできました。このすばらしい救い、福音のメッセージはイエス・キリストが中心だからです。イエス・キリストは人としてこの世に来てくださり、あなたの罪の身代わりとなって十字架で死んでくださり、そして、約束どおり三日後によみがえってくださった、このキリストの十字架と復活によって信じるすべての人の罪が赦される、あなたもイエスによって罪赦される、神はこのようすばらしい祝福を救いをイエス・キリストを通して信じる一人ひとりに与えてくださった、だから、信じた者はイエス・キリストを通して神を称えるのです。主なる神がイエスを通して与えてくださったすばらしい祝福、それをいただいた一人ひとり、その祝福をくださった仲介者イエス・キリストを通して父なる神を心からほめ称えるのです。パウロはそのことをしているのです。パウロはこの救いに関して、だれがこの救いをもたらしたのか、だれがほめ称えられるべきなのかを分かっているのです。神のみわざ、神の恵みだと。だから、私はこのすばらしい救いを与えてくださった神を、しかも、この救いを与えるために人として十字架に架かり、約束通り、三日後によみがえってくださった救い主イエス・キリストを通して感謝するのだと言うのです。パウロは分かっていた。救いがどういうものか、神はどういうお方かを…。神に仕えた人、主に仕えた人パウロ、彼は先ず、主を知っている人でした。神がどのようなお方であるのかをよく知っていた人物でした。

## 2) 主を心から愛する人 9節

二つ目に見るのは9節です。あなたが真に主に仕える人なら、あなたは主を心から愛する者でなければなりませんと言います。この9節以降を読んで行くと、繰り返し、私はローマにいるあなたがたを訪問したいと話しています。「使徒の働き」の中にもそのことが記されています。ところが、そのことはなかなか叶いませんでした。その説明を彼はこれからしてくれます。もしかすると、ローマの人たちは思ったかもしれません。なんだパウロ、訪問すると言いながら1回も来てくれないではないかと。そのようなやりとりがあったかもしれません。なぜなら、パウロがこれから話そうとしていることは、どうも、そのことに対する答えであるかのように思えます。しかも、パウロはここで、ローマをなかなか訪問できなかったことの原因を説明するだけでなく、彼らに対してどのような思いをもっているのか、そのことも説明するのです。パウロはローマにいる兄弟姉妹たちのことを心から愛していると、そのことを告げて行きます。これから私が言うことは真実だ、私がどのようにあなたがたのことを思っているかと。ですから、9節で「**神があかしてくださるのですが、**」とこのような表現を使っています。私の心を知っている神が、私がどのような思いをもってあなたがたのことを考えているかあかしてくださると、非常にはっきりした表現をもって、パウロは自分の思いが真実であることを彼らに伝えようとしています。そして、9節ではパウロがどのように神に仕えていたのか、そのことも見ることができます。「**私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神が**」と記されています。「**御子の福音を宣べ伝えつつ**」と「**霊をもって**」とこの二つの文節を今しっかり見たいと思います。とても大切なことをパウロは教えているのです。なぜなら、この二つの文節は、パウロがどのようにして主に仕えていたのかを説明してくれているからです。原語ではこのように訳せません。「私が私の霊において、御子の福音において仕え続けている神、」と直訳するならこのようになります。新改訳聖書の訳を使うなら「私が私の霊をもって、御子の福音をもって仕え続けている神」となります。気付かれたように、この新改訳で「**宣べ伝えつつ**」と記されているところは、実際原語には出て来ないのです。これは補われているのです。なぜなら、こういう意味がここには含まれているからということで補っているのです。「～において」、「～をもって」とどちらの訳でも、パウロが言いたかったことは、彼がどのように神に仕えていたのか、そのことを言っているのです。言い方を変えるなら、彼がどのように生きていたのかをこの二つの文節は明らかにしているのです。

◎パウロはクリスチャンとして神に仕える者として、どのように生きていたのか？

### 1) 霊をもって

原語には「私の」と記されています。「私の霊をもって」「私の霊において仕えている」とパウロは言

います。パウロは自分の内的なこと、心のことを言っているのです。彼は「私は心から精神誠意主に仕えている」と言っているのです。ですから、「私の霊をもって、私のうちなるすべてをもって」と、それがパウロが言いたかったことです。私は自分のすべてをもって主にだけ仕えようとしている、神の栄光のためだけに私は生きようとしていると、そのことをパウロは言いたいのです。実は、そのことはパウロだけが言ったのではありません。パウロに関して語った人もそのことを教えています。異邦人がイエスを信じ始めました。ユダヤ人の間ではそのことがなかなか受け入れられなかった、それで皆がエルサレムに集まって来ました。異邦人が救われ同じような奇蹟のみわざが起こっている、いったい、何が起こっているのだろうと、それで神はすばらしい祝福を異邦人にも与えたのだと、そのような結論をこのエルサレムで行なわれたエルサレム会議で一致しました。その後、エルサレム教会の使徒と長老たちはパウロとバルナバとシラスをアンテオケへ送ろうとします。その際、彼らはある手紙を記しそれを彼らに託し、異邦人の教会に持って行くようにと言います。アンテオケ、シリア、キリキヤにいる異邦人の兄弟たち、異邦人のクリスチャンたちに対してあいさつを持たせたのです。そのあいさつの中にはこのように記されているのです。使徒の働き15：26「このバルナバとパウロは、私たちの主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たちです。」と、イエスのために彼らはいのちを投げ出したと言います。エルサレムの教会の人々、長老たち、そして、この当時存在した使徒たちはこのパウロを見て、まさに彼らは自分のいのちを喜んで主のために犠牲にするような人たち、自分たちのすべてを主にささげた人たちだと言います。どうしてそのことが分かったのでしょうか？彼らはその通り生きていたからです。彼らは世の中のことに妥協することなく、神が喜んでくださることのためにと、そのように生きていた人たちだったからです。ですから、先に読んだような評価をエルサレム教会の使徒や長老から受けたのです。また、パウロはローマ14：8で「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」と言っています。これがクリスチャンなのです。私たちはキリストとともに死んで、私たちはキリストとともによみがえった、私たちが生きてるのはこのキリストのために生きて行くこと、キリストの栄光のために生きること、それがクリスチャンである、そのように彼らは生きていたのです。ですから、パウロはここで主に仕える者として、私は私の霊をもって、私は私の霊において、つまり、私の内なるすべてをもって、中途半端な気持ちではない、半分世の中を見ながら主に従うのではない、すべてのものをもってこの神の栄光のためだけに生きて行きたいと、そのあかしをしているのです。

## 2) 御子の福音を宣べ伝えつつ

もう一つは同じ9節に「私が御子の福音を宣べ伝えつつ」と言っていることです。「御子の福音をもって」、「御子の福音において」仕えているというのですが、この説明をする前に、パウロは「御子の福音」ということばを選択しました。私たちはもう学んできたから分かります。この福音はイエスが中心だから、福音のメッセージはイエスです。そのことを説明したパウロはここでも敢えて「御子の福音」と言っているのです。人間が勝手に作り出したものではないのです。人間の勝手な話でもないのです。イエス・キリストがいったいだれであり、彼が何をしてくれたのか、あなたのために救いを備えてくれた唯一の救い主、その救い主を与えてくれた唯一の救いのメッセージ、だから、パウロは「御子の福音」ということばをもってそのことを再び説明するのです。先に見た「霊をもって」というのはパウロは自分の心の中、内的なことを話しました。今度は、外的なことです。つまり、福音宣教のことです。福音を宣べ伝えるということです。パウロは「私は神に対して私のすべてをもって仕えている」と言いましたが、それだけでなく、「私はすべてのことをこの福音が広がって行くために行なっている」と言うのです。ですから、ここでは「宣べ伝えつつ」と表現しています。宣べ伝え続けているからです。なぜなら、彼が生きる間、この地上にいる間、彼の目的は一つでした。「私は私のすることすべてを通してこのイエス・キリストのすばらしい救いが人々に伝わるように、そのために私はすべてのことをして行きたい」と言うのです。もう一つ見ていただきたいことは、「私が御子の福音を宣べ伝えつつ」とありますが、「福音を語る」とは言っていません。というのは、先ほど原語での訳を説明しましたが、つまり、「口で話す」と敢えて言わないのです。なぜなら、福音宣教を目的に私はすべてのことをしている、イエスの救いがすべての人に伝わって行くように、そのために私はすべてのことをしていると言うパウロは、福音宣教は語るだけでなく、どのように生きるかによって伝わって行くからと、ことばだけに限定しなかったのです。私たちの態度、行動、そのすべてが含まれるのです。パウロはIコリント9：23でこのように言っています。「私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みとともに受ける者となるためなのです。」とパウロが証しているように、福音を宣べ伝えて人々が神の恵みによって救いにあずかったなら、私もその祝福をいただく、ともに喜べるからと言うのです。

皆さんに考えていただきたいことは、皆さんはそのような思いをもってすべてのことをしておられますか？私たちは何となく伝道というと教会の中での特別なプログラムのこと、また、教会に来ているこ

の場所だけとっていないでしょうか？パウロは神に仕える者として、そのように働きの場所を限定して話していません。24時間365日です。今の私たちはレストランで食事をしているときも、電車に乗っているときも自転車に乗っているときも、友だちと会っているときも家族で過ごしているときも、仕事に行っているときも学校に行っているときも家で休んでいるときも、すべての時間、彼が考えたことはただ一つ、イエス・キリストを知らない人に何とかこのすばらしい救いを知ってもらいたい、そのために何をしようということ。皆さんの家族の中で救われていない人がいますが、皆さんは本当に彼らの救いのことを真剣に考えておられますか？もう十分伝道したからいいと思っておられますか？私たちはまだ、この地上からこれまでと言われて去るそのときまで、この大きな責任をもっています。パウロは後で、この福音を伝えることは自分にとって義務であると言っています。どうしてもしなければならぬことだと。そのような思いをもって私たちはキリストの福音を伝えているのでしょうか？私たちはキリストのすばらしさが人々の前で明らかになるようにと願って仕事をしているのでしょうか？友人たちと交わるとき、この機会を用いて彼らが私の信じている救い主のすばらしさを知ってほしいと願いながら時間を取っているのでしょうか？私たちはあらゆるときにそのように願いながらすべてのことをしているのでしょうか？パウロはそうしたのです。だから、彼は心から私の霊をもって、私のうちなるすべてをもって誠心誠意主に仕えている、そのような心をもっているゆえに、すべてのことをこの福音宣教のためにしていると言います。神は喜んで彼を用いたはず。そして、神の栄光は間違いなく彼を通して大いに現わされました。問題はパウロではありません。あなたです。信仰者だと言っているあなた、神に感謝しているあなた、問題はあなたがそれらをどのように現わしているかです。あなたはパウロが教えたように、このような思いをもって、キリストの福音宣教のためだけに生きようとしているかどうか、そのためにすべてのことをしているかどうかです。未信の方々と接する機会はたくさんありますが、私たちは彼らとどのように過ごしているのでしょうか？すべてキリストの福音を伝えるために過ごしているのでしょうか？私たちはこの出会いを通して何とか彼らが救いに導かれるようにと願います。ここまでの真剣さがありますか？私たちは何となくクリスマスの特別なプログラムを行なって神に対して伝道の働きをしたと聞いていませんか？神が望んでおられることは、そのような働きよりも、あなたが日々どのように生きるかということです。パウロが言っていることは、特別なことではなく、このような思いをもって日々主に仕えているということです。なぜなら、救われた私たちはそのように生きる者だからと言うのです。実は、そのことはパウロだけではありません。イエス・キリストも望んでおられることです。マタイ5：16のみことばを覚えておられるでしょう。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」、あなたがたが良い行ないを継続して行くことによって、まだイエスのことを知らない人たちが神を信じて神を崇める者になって行くように、そのことを目標に生きて行きなさいと、イエスはそのように言っているのです。どうでしょう？未信の方が教会に入って来られます。英語を学ぶため、韓国語を学ぶためかもしれません。ただ配達に来たのかもしれませんが、でも、彼らが私たちクリスチャンと接するときに彼らがキリストを見ているかどうかです。もし、あなたが神に仕える者ならその責任があると言うのです。ペテロもそのことを教えています。1ペテロ2：12「異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」、「りっぱにふるまいなさい」と言います。「りっぱに」、道徳的に良いこと、神の前に賞賛に値するようなこと、常に真実を話し正しいことを行なって行きなさい、「ふるまいなさい」、そのように生きて行きなさいと言うのです。それがみことばが私たち信仰者に教えていることです。そして、ペテロはこのように続けます。なぜ、そのように行なって行くのか、「そうすれば、」と言い、結果を話します。そのようにあなたが正しく接するなら、未信の方々は「何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」と言います。その中で神を受け入れる人が起こるからです。確かに結果は分かりません。しかし、イエスが言いペテロも言いました。それは私たちには大きな責任があるということです。

ペテロは続いてこのように言っています。1ペテロ2：21-23「あなたがたが召されたのは、実にもそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。：22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。：23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」、また、3：9でも「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」と言っています。神の恵みにふさわしく生きて行くことです。神が喜ばれる正しいことを選択して行くのです。神は私を評価してくださるのでしょうか？「わたしに従って忠実に生きている！」と。私たちは神に仕える者です。私たちはすべてのことをこのキリス

トの福音が伝わるためにするのです。それが神によって贖われたあなたに主が望んでおられることなのです。クリスチャンである皆さん、あなたが本当に救われているなら、神はあなたがそのように生きることを望んでおられます。今、あなたが自分自身に問いかけなければいけないことは、そのように私は生きているかどうか？ということです。そして、今から神に仕える者としてパウロがペテロが歩んだ生きざまに倣って生きることです。心から、あなたのすべてをもって、一人でも多くの罪人がこの救いに触れることができるように、この救いのメッセージを一回でも聞くことができるように。